

## 敗戦から今日まで

北海道 安彦 昭

樺太で生れた私は、少年の頃大きくなったら鉄道には  
いり車掌、助役そして駅長になるのが夢だった。そのね  
がいがなまって車掌にまでなった昭和二十年六月、数え  
年十九歳で沿岸警備隊に召集され日中は山の中で塹壕掘  
り、夜は敵が樺太に上陸したと仮定して鉄橋爆破或いは  
重要施設爆破にダイナマイトを仕掛けに夜露に、又は雨  
降りでビショぬれになりながら、しかしダイナマイトと  
発火器は絶対ぬらさずに目的を達する訓練の毎日であっ  
た。

だが戦いは八月十五日終わった。召集解除、だがソ連軍  
が惠須取を爆撃、日本人はゾロゾロ夜ばかり歩いて鉄道  
のある久春内駅に集結した。そのため駅はその人達で  
いっぱい、これを大泊まで運んで北海道に帰さねばなら  
ない。私は車掌区に戻り早速引揚列車に常務して久春内

からの輸送に従事した。

八月十九日この日は雨降り引揚者は無蓋車に乗って  
るためズブぬれ、真岡到着したのが二十日午前一時半、  
午前六時には大泊に向かって出発する。私は勤務を終っ  
て合宿へ帰って寝た。

朝六時頃発動機の音らしい騒音に目をさます。合宿所  
が山の上で窓から海が見える。次第に朝もやが晴れてき  
たその海上には数十隻の小型船、その中には軍艦らしき  
ものが見える。ソ連軍だ。皆んなを起し合宿所の横の防  
空壕に飛び込み避難、午後四時頃ソ連軍に発見され捕虜  
となる。服装検査の上ソ連輸送船に監禁されること四日  
間、その後港の漁連倉庫に監禁。

一週間ほどたったある日、ソ連軍将校が来て鉄道の機  
関士と車掌がいたらでてこいという。車掌の私もでたら  
将校曰く、「お前達はこれから機関車と車掌車で通信線  
の復旧、鉄道線路の異状の有無を検査する仕事につけ」  
とのことだった。嬉しかった、ようやく自由になれる。  
親にも会える。早速仕度にかかった。しかしすべては捕  
虜になったときの身なりだ。合宿に戻ってもみな荒らさ

れて雑然……。やがて列車の点検を終え出発した途中。小能登呂村で汽車を止め我が家に立ち寄った。父親が三人目の息子も死んだと思っていたとるへ突然帰ったから喜んで、もう行くなという。しかしそんなことをしたらどうされるかわからないから父親を説得し、着替えをしてまた汽車に戻る。三日間西海岸の鉄道、通信線を検査して帰りソ連軍の將校に報告した。「ハラショー、カンドクトル」よりしい、いい車掌だということでもソ連の信用を得た。

そんなことで私は他人より早く解放された。あき家になつた鉄道官舎を住居とし自炊生活がはじまる。そのうち同僚の車掌が、あちこちから帰ってきた。一番気心のあつた者三人だけ仲間に入れて四人の共同生活を始め車掌区勤務をした。機関士や車掌は一定の勤務時間ではどうにもならない。毎月超過勤務。そのため超過勤務手当がついて大変な生活が出来た。

二十一年三月結婚、空き鉄道官舎で世帯をもつた。二十二年十月ソ連民間人の居住する住宅がないため官舎に入つてた私に引揚命令がきた。十一月函館に上陸した時

二十年に沿岸警備隊に二か月ほどいたということで軍人の給与として六百円給付された。親戚を頼って美唄に来たが、想像に反し邪魔者扱い、岩見沢に六畳間を借りて岩見沢車掌区勤務となつた。しかし給料は安く家賃を払うこと、子供の出生準備、官舎は新入者だから何年後に当るかわからない。そんなことで生活は苦しく、そのため休日、非番日は農家へアルバイトと、冬は物売り、石炭手当を生活費にあてるため石炭拾い、こんな生活に何年も堪え抜いて二十年子供達も親の貧ぼうを知つて唯一人大学へゆきたいといわず高校卒業でそれぞれ就職、三人の子供達は今幸せな家庭を作っている。

私も努力が実り現在では企業の経営者数多い公職、役職につき、その所属団体の発展に、市政の振興に、ボランティア活動にと幅広い充実した日々を送っている昨今である。